

## 2歳児の言葉の発達についての事例的検討

～演習「乳児保育」の授業デザインに向けて～

Case Study of the Development of Language in 2-year-old  
—For the Teaching Design of (Child Care)Education—

松 尾 寛 子

Hiroko MATSUO

### 抄 録

乳幼児期は心身の発達が盛んであるため、保育者は発達段階を理解する必要がある。本研究では2歳児Kの事例をもとに、乳幼児がどのような言葉の発達を遂げるのかを事例検討し、そこから保育士養成校における学生がどのように乳幼児の発達について理解を深めていけばよいのかを検討するため、保育士養成校における子どもイメージについて学生を対象に調査し、これら2つの検討事項より、実習前教育でもある、今後の演習「乳児保育」の授業デザインに向けたいと考える。

### 1. 問題と目的

他者との関わりの中から広がりを見せる言葉の発達について、乳幼児を取り巻く様々な人的環境が影響を与えることは言うまでもない。乳幼児期より乳幼児同士の関わり、乳幼児と保護者、乳幼児と保育者との関わりを通して、喜びや悲しみ、葛藤場面など様々な経験をし、他者とのコミュニケーション技法を獲得している。

現代では社会や産業の変化に伴い、子育て環境や乳幼児自身、さらには乳幼児を取り巻く全ての環境において大きな影響をもたらしている。乳幼児期における他者とのコミュニケーションについては、乳幼児のその後の人との関わりに関する基礎として非常に重要な役割を果たすため、乳幼児にとって悪影響を及ぼすことがあってはならない。

したがって、乳幼児を育てる保護者はもちろんのこと、保育者自身も乳幼児とのコミュニケーションの取り方や、コミュニケーションの大切さを理解していないと、乳幼児の人格に大きく影響を与えてしまうことを念頭に置かなければならない。

---

\* 非常勤講師

そこで本研究では、保育士を目指す学生に対し、乳幼児の言葉の発達について、事例を基にした授業展開をするべく、2 歳児の言葉の発達の特徴について検討していく。さらに学生アンケートより、学生は2 歳児をどのようにとらえているのかを知り、今後の「乳児保育」の授業デザインに向け、乳幼児への語りかけや、乳幼児への関わり方の具体的な方法を学生に理解させることや、各年齢の発達を理解させるためには2 歳児の言葉のどのような事例を提示すればよいのかを探るため、乳幼児の言葉の発達の特徴について2 歳児Kの事例を検討した。

## 2. 先行研究概観

乳幼児が言葉を獲得するプロセスについては、乳幼児の発音について等、様々な研究がなされており、オノマトペ的使用も含め、乳幼児の発話については乳幼児を取り巻く大人の影響が非常に大きいことがわかる。他者との関わりが乳幼児の言葉の発達について影響を及ぼすことは周知の通りであるが、本研究では2 歳児Kを取り巻く大人（母、筆者）との関わりを中心とした、乳幼児対大人の関わりについて調査した。乳幼児の言葉の発達についての先行研究は以下の通りである。

三好（2002）は「乳幼児言語研究 ― 1～2 歳児における発声語の文法的特質②―」において「自発的に表現する前段階である1.1～1.3も、言語環境の整備上、決して軽視してはならない時期と言えよう<sup>1</sup>」「乳幼児の表現には様々な可能性が秘められている。その可能性を引き出し、伸ばしていくのは大人の重要な責任である。周囲の言語環境を整え、乳幼児独特の言語表現に常日頃から耳を傾け、愛情に基づいた言葉かけと積極的なコミュニケーションを図っていくことが今求められている<sup>2</sup>」とし、さらに中島（2004）は「乳幼児の提示的呼びかけについての一考察 ― 保育所1・2 歳児クラスにおける参加観察から―」において「提示的呼びかけを受けとめ、乳幼児とやりとりすることは、その乳幼児の[私という自己の意識]のめばえのためにも重要であるが、そのためには一対一のやり取りを大切にすることが欠かせないことも提示的呼びかけが生まれた場面の検討から確認できた<sup>3</sup>」と述べている。また長谷部（2002）は「言葉の発達をうながす乳幼児の環境 ― 1歳～3歳までの家庭環境に関する考察―」で「集中して話の聞ける乳幼児を育てるためには出生してから、周りの大人とのコミュニケーションがとれるようになるまでに、我々養育者側が気をつけなければならないことが数多く存在した<sup>4</sup>」と述べている。

これらのことから乳幼児を取り巻く身近な大人が、愛情をもって、積極的に関わっていくことの大切さが読み取れる。乳幼児の言葉の発達には大人が大きな影響を与えることが実証された。

## 3. 1 歳児期までの発達の概要

乳児の発達は様々な面において目覚ましいものがある。乳児は生後まもなくより、自分の思いやして欲しいことを言葉で伝えるのではなく、空腹時やオムツがぬれたときなど、生理的に不快な状態の時には泣くことで周りの大人に知らせ、不快な状態を取り除いてもらう。生後まもなくは乳児の動きは不随意運動である反射によるものがほとんどである。例えば口唇探索反射、把握反射などがあげられる。その

他いくつかの原始反射が乳児の初期段階にはみられる。こうした原始反射は脳皮質が成熟するにつれて消失し、随意運動を獲得していくようになる。随意運動を獲得すると、興味を示したものに対して手を伸ばす行動が見られたり、手にとったものを口へ入れたりしながら、ものを知覚していく。また、微笑も快の状態であつとまどろんでいるときに見られる。これを生理的微笑という。やがて人の顔などに反応して微笑が見られる社会的微笑へと変化していく。

人は人として生まれ、人として育っていくためには、人との関わりが必要不可欠なのである。

乳児は生後まもなくより、生理的に不快な状態の時に泣いて大人に知らせ、不快な状況を大人の手により取り除いてもらうということは上述したとおりである。それだけではなく、身近な大人を呼ぶ時にも泣くという行為が見られる。生理的に不快な状況を取り除いてもらうために泣くということは、大人の“泣き”と違い、悲しいから泣く・嬉しくて泣くというのではないということはいうまでもない。したがって乳児をとりまく大人はその“泣き”によって、何を伝えようとしているのか、何が必要なのかを読み取らなくてはならない。つまり乳児をとりまく大人が、乳児が何を伝えようとしているのか、何が必要なのかを読み取ることができなければ、乳児は自分の欲求を満たすことはできないのである。空腹やオムツがぬれたときのように普段から見られる泣きなのか、激しい痛みなどの泣きなのかを読み取ることも求められるのである。このようにして乳児は自分の欲求を満たすために発声し、身近な大人に自分の思いを泣くという行為で伝え、コミュニケーションを図っているともいえる。

自分の意思で手足を自由に動かすことができるようになると、見たものに手を伸ばしたり、それをつかもうとする行為が見られるようになる。

また、姿勢の変化も見られるようになる。寝た状態から自分で姿勢を変えることができなかった新生児期から、生後4か月頃までには首がすわり、うつ伏せにした状態で頭をもたげることができるようになる。生後7か月頃には座位が可能になる。9か月頃までには、はうことも可能になる。1歳前後にはつかまり立ちが可能になり、1歳を過ぎると一人で歩くことができるようになる。

こういった姿勢の変化は見えるものの変化であり、見えるものが変わると、興味の幅も広がりを見せるようになる。

生後1年ぐらゐの間に形成される、特定の養育者との間に心理的な結びつきのことを愛着という。この愛着は後の対人関係パターンの基本となるもので、この時期における特定の養育者との心理的な結びつきが大変重要である。

#### 4. 2 歳児Kの言葉の発達について

三好(2002)乳幼児言語研究の中で「言葉の獲得方法は、産まれながらにして身につけているものではない。自分以外の人(他者)の存在に気づき、理解して行く中で初めて獲得して行くものである」と述べている。ここでも乳幼児を取り巻く他者が、言葉の発達に影響を与えていることがわかる。そこで2歳児の言葉の発達について、Kの事例を挙げてみることにする。なお、Kを対象児としたことについては、筆者とK、筆者と母親のレポートの形成できており、参加観察時よりKとの関わりが密にとることができるためである。

2歳児の言葉の発達について三好（2002）が乳幼児言語研究の中で対象児との関わりの中から「①親子とのコミュニケーションが成立しているもの。②行動と発声語の内容がほぼ一致しているもの。③『アブー』『ダッダ』等、喃語的なものの以外で、有意味語として認められ、品詞分析が可能であるもの。という3つの条件を満たしたもの<sup>6</sup>」を抽出した。そこで筆者は乳幼児の言葉の発達という観点から考えた場合、三好（2002）の研究を参考に、①発声、②言語によるコミュニケーション、③意思伝達（身ぶりなど）、の3項目に独自に分類し考察した。

#### 【調査対象】

K：2歳8か月（2007年7月現在）

父・母・Kの3人暮らし

2007年9月よりT市の公立保育所の2歳児クラスに入所。

現在、Kの住んでいるT市の隣の市（W市）に祖父母宅があり、1日2時間から6時間、週に3～4回、母と共に遊びに行っている。

#### 【調査時期】

2007年6月～8月

#### 【調査方法】

対象児Kに対し、おおむね週1回、1日2時間程度、参加観察を実施した。なお、Kとのかかわりに際し、録音機器・ビデオ等は使用していない。

#### 【事例と考察】

##### （1）発声

##### －事例① 2007年6月－

Kの母が運転する車の中で、ある日本の女性アーティストの曲がかかっている。Kは鼻歌程度の音量でメロディーを口ずさんでいた。

事例①より、2歳児の発達における発声は単に「ア－ア－」や「ウ－ウ－」などの喃語レベルにとどまらず、音域を調整し、メロディも口ずさめることがわかった。Kは全てのメロディを口ずさんでいたわけではなく、所々口ずさんでいた。曲の全てを口ずさめるというわけではないが、口ずさめるところになれば曲に合わせて口ずさんでいた。母によると、曲が流れているときにKが口ずさんでいると、その曲が何の曲か分かるとのことである。その他の曲についてはKがかけてほしいや筆者に歌って欲しい曲があると、単語レベルで要求することはあった。

##### （2）言語によるコミュニケーション

##### －事例② 2007年7月－

母によるとそれまで週に1度程度、午前中のみ保育所へは遊びにいったことはあるが、Kは9月より保育所へ毎日通うことを楽しみにしているとのことである。そこで筆者はKとのコミュニケーションの中で度々保育所の話をしていた。ある日Kは「Kちゃん、9月から保育園行く

ねん」と筆者に話してきた。筆者が「そうか、Kちゃん9月から保育園行くんやね。」という  
とKは「うん」と言いながらうなずいた。

母が筆者や祖母に対して、Kがいる場で「Kは9月から保育園行くねん」と話することがあった。保育  
所という場がどのような所なのかということは、事例②の冒頭に述べたように、Kは週に一度通ってい  
ることから部分的ではあるが理解していると思われる。筆者や祖母が「保育園で何したの？」と尋ねる  
と「あそんでん（あそんだ）」と話することがあった。また「保育園、楽しい？」と聞くと「うん」と答  
えたことから、保育所＝楽しいところ、ということは認識できている。

後の事例⑥では、Kが保育所にいくことをKと筆者が話したが、Kは7月時点で「Kちゃん9月から  
保育園行くねん」と話していたため、8月時点で筆者が「Kちゃん、保育園は何月から行くの？」と尋  
ねたら、「うん」と答えたということから、2歳児期は「〇月」という月の理解にまで至っていないこ  
とがわかった。

このことにより、「9月から保育園に行く」というKの言葉のうち、「9月から」という部分について  
は大人同士の会話を聞いての発話ということがわかった。

－事例③ 2007年6月－

食事の後、オムツ交換をしようと、筆者が「おしっこ出でて気持ち悪いやろ。パンツ（オム  
ツ）換えよか」と話すと、「Kちゃんおしっこないねん」と言う。オムツが濡れていることは  
わかっていたので筆者が「ほんとに？」と言ったあと「マジで？」と言ってみた。するとKは  
筆者が言ったのと同じような口調で「マジで？」と言った。

事例②・③より2歳児期は子どもを取り巻く大人の言葉の影響を受け易い時期であるということが確  
認された。事例②は9月からという言葉、大人の会話の中から聞き、それを使用したものと思われる。  
事例③では「マジで」という言葉を使用した筆者の言葉を、そのまま筆者が言った後すぐに真似をした。  
0～1歳児期であると、分からない言葉に対しては反応しないこともあったが、2歳児になると、大人  
と同じような口調で話をしたり、大人が使っている言葉を真似をしたりすることが多く見られたため、  
子どもを取り巻く大人の言葉遣いや子どもに対する言葉がけには、子どもに使用して欲しくない言葉は  
使用しないという配慮が必要だということがわかった。

－事例④ 2007年8月－

Kの自宅のテレビが壊れたとのことで、新しい42インチのテレビを購入し、届いたようである。

筆者の自宅に遊びに来たとき、Kが28インチのテレビを見て「これ（テレビ）、ちいさいな」  
と話す。また、筆者の自宅に置いているアンパンマンのオムツを指して「これ高いやつ」と話  
した。

2歳児期になると大きいー小さい、高いー低いなど、ごく簡単な比較は可能になってくる。また、筆  
者との遊びの中で、左右どちらかにおもちゃを隠し「どっちだ？」とKに当てさせる当てっこ遊びをし

た。どちらかに隠されているということは理解しているため、当てっこ遊びが可能になってくる。このことより 2 歳児期は簡単な 2 方向の比較について、可能になってくるということがわかった。

しかしアンパンマンのオムツを見て「これ高いやつ」という言葉については、以前アンパンマンのオムツを買いたかった K が母に言われた言葉を使用したと思われる。

金額が安い高いということは、母の話を聞いて発した言葉と思われるため、金額が高い安いまでの理解には至っていないのではないかと思う。

－事例⑤ 2007年7月－

「Kちゃん2階行きたいなーって（2階へ行きたい）」というので筆者が「じゃ、2階行こか」というと K は「うん」というはずく。さらに筆者が「じゃ、Kちゃん是谁と2階に行きたいの？」と聞くと「うん」と答えた。

－事例⑥ 2007年8月－

K が 9 月から保育所に入所するため、筆者が「Kちゃん、9月から一人で保育園行くの、いいなぁ」と言うと K は「Kちゃん保育園行くねん」と答える。さらに筆者が「ねーねーちゃん（おねえちゃん：筆者）も一緒に行ってい？」と聞いたら K は「うんいいよ、Kちゃん保育園行くねん」と言う。筆者が「Kちゃん、保育園は何月から行くの？」と尋ねると K は「うん」と答えた。

発語のレベルと、理解言語のレベルに差があり、乳幼児の場合、理解言語の方が高い。例えば 1 歳児の場合、「これ、おとうさんの所に持って行ってちょうだい」と母親がいうと、渡されたものを父親の所へ持っていくことができる。しかしその言葉を同じように発することができるかというところではなく、「とうしゃん（おとうさん）、はい」といいながら渡す程度の語彙なのである。1 歳児は一語文から二語文を獲得する時期なので、乳幼児を取り巻く大人の言葉を同じように使用したりする。事例⑥・⑦からみてとれるように、K にとって理解できる言語に対して応答している。しかし「じゃ、Kちゃん是谁と2階に行きたいの？」と聞かれても筆者が発した言葉のうち「Kちゃん」という言葉と「2階に行きたい」という言葉から、筆者の言う「誰と」の部分飛ばして「Kちゃん、2階行きたい」を理解し「うん」と答えたのではないかと考える。

（3）意思伝達

－事例⑦ 2007年8月－

自宅以外の場所で昼寝をしようとしないう K であると母は話していた。この日も昼食後、昼寝を促す母や筆者に対し、「Kちゃん、眠たくないねん」と話し、筆者に「ねーねーちゃん（おねえちゃん）あそぼか」や「2階いこか」などと話す。筆者は K が横たわるような遊びを提案して、K も同じように横たわってもすぐに起き上がり、別の遊びに誘う姿が見られた。夕方 4 時頃、K がはしゃぎはじめたので、母や筆者が「お昼寝しよう」と声をかけるが、結局その日は自宅に帰った 6 時頃より翌日朝 6 時ころまで入浴せずに眠っていたとのことである。

### 【1 歳児期のエピソード】

Kが1歳5か月の頃、300mほどの距離を歩いてスーパーに出かけた。その際、Kは筆者とKの祖母の二人と手をつなぎ歩いていた。スーパーに向かう際、Kは300mの距離を歩いたが、帰り道は息を切らしながら歩いていたので、筆者が「抱っこしようか？」とKの前に立ち抱き上げるポーズをとると、Kは筆者の抱き上げるポーズに対して体をそむけて、歩くという意思表示をした。

上記のエピソードについては、1歳児期のものであるが、大人の言葉がけに対し、自分の思いを言葉以外の方法で伝えようとする姿が見られた。これは「イヤ」「ジブンデ」という言葉を発するのみが相手に思いを伝える方法ではないということ、また、大人側が乳幼児の言葉のみならず、言葉以外の方法を理解して行くこと、つまり乳幼児理解が必要不可欠であるということがわかるであろう。

2歳児期までのKの発語に関しては次のような言葉も聞かれることがあった。

1歳時期には「ネーネーチャン（おねえちゃん）」「マイマイ（マヨネーズ）」「チータン（おとうさん）」「イチボ（いちご）」「ニカイ イク（二階に行く）」「バアバ（バアバ、来て）」犬を指して「ハルチャン（犬の名前）」「ネーネーアソボ」「アンマンマン（アンパンマン）」「ドーエモン（ドラえもん）」「パイパイ（おっぱい）」などの多くの単語を習得したKであるが、2歳児になると語彙はもちろんのこと、相手により伝わり易い文としての発語が見られるようになった。筆者がアンパンマンのキャラクターを指し「アンマンマンやね」というと「アンパンマン」と正しく答えたりもした。

また2歳児後半になると「だって」「でも」などを付け加え話し始めることもあった。

## 5. 乳幼児の発達について（学生アンケート）

乳幼児の発達について学生はどのような理解をしているのか実態を調査するため、2007年4月、保育士養成校A校の「乳児保育」受講生71名を対象に就学前の乳幼児0歳児から5歳児までの乳幼児イメージを自由記述式させた。

なお、乳児保育履修者の中には保育士資格取得希望者と保育士資格取得希望しない学生が共に履修している。

### 【調査対象】

対象者：A大学2年生「乳児保育」受講生71名（保育士資格取得希望者50名を含む）

### 【実施時期】

2007年4月

### 【実施方法】

「乳児保育」の初回授業終了後、調査用紙を配布し、調査項目について約15分間自由記述させた。

### 【調査項目】

調査項目については、初回の授業ということもあり、授業に関連する項目も併せて調査したため、本研究で関連のある項目についてのみ取り上げると以下の通りである。

- ①乳幼児と関わった経験があるか
- ②乳幼児と関わる仕事がしたいか
- ③理想的な保育者像
- ④乳幼児イメージ

【調査結果と考察】

①の項目について、乳幼児と関わった経験のある学生は、64名いた（90.0%）。ボランティア等で長期にわたり乳幼児と関わっている学生もいる。乳幼児と関わった経験のある学生の中には、親戚の子ども、職場体験、高校の授業で実習に行った、いとこの子ども、託児ボランティア、学童保育のアルバイト、甥・姪、幼稚園にボランティア、保育所にボランティア、ボーイスカウト、アルバイト先等で関わっている。

また④の項目については、本研究で2歳児の言葉の発達における事例検討であるため、学生が自由記述したもののうち2歳児のイメージについてのみ取り上げると以下の通りである。

- ・心身の発達…「少しずつ一人で歩けるようになってくる」「歩き始める」「道具を使って遊ぶ」「マネをする」「親のすることを自分もしたがる」「買って欲しいものを買ってもらえなかったら泣いて暴れてねだろうとする」「名前を覚える」「他人とのかかわりを意識している」「いろんなものに興味を示し、さわったり口に入れたりする」「自分の思い通りにいかなかったら泣き出す」
- ・言葉の発達…「簡単な言葉（ブーブー）とか話す」「単語で話す」「だいぶ言葉を覚えたかな」「言葉を少しずつ言えるようになった」「喋ることができる」「単語で話せるようになる」「話したりするけど、言葉がたどたどしくて、何が言いたいのかかわからないときがある」「大人みたいにしゃべる」「言葉が発達してくる」「まだ言葉にはならないけど、何かよくしゃべっているイメージ」「単語で話す」「自分の名前が判断できるようになる」「会話ができる」「言葉ウー・アーなど言いはじめ」などが挙げられる。

学生の90.0%が乳児保育履修以前に何らかの形で乳幼児と関わった経験があるものの、関わった頻度には個人差があり、乳幼児とかかわった経験＝正しい乳幼児発達理解、とまでは至っていないように感じた。特に言葉の発達については2歳児においても0歳児・1歳児レベルの発達と認識している学生もあり、上述した学生の2歳児イメージでは「簡単な言葉（ブーブー）とか話す」と答えた学生もいた。

このことより、実習経験以前の学生には、乳幼児の発達を正しく理解させるために、「乳児保育」の授業の中でも発達段階をしっかりと押さえておく必要があることがわかった。筆者が授業の中でKの事例を話すと、授業終了後の感想の中でKの事例に興味を持ったという内容を記述する学生が、各回授業終了のたび数名ずついたため、学生がイメージしやすいような事例を取り上げていかねばならないと感じた。

## 6. 乳幼児を保育する保育士の役割・資質

乳幼児と接する保育士は、乳幼児からのアプローチを待つだけでなく、喃語や一語文などで要求を伝える会話形式以外でのコミュニケーション以前の乳幼児に、積極的に言葉をかけるなどしてコミュニ



ケーションを図っていかなければならない。それは保育行為の基本であり、ひいては乳幼児を保育する者全てが兼ね備えておくことが望まれる行動の一つである。

保育士は学生時代に学んだ専門的な知識を基礎として、関わる乳幼児の発達段階をしっかりと押さえた上で保育をする。それはいわば乳幼児一人ひとりに応じた対応をするということであり、乳幼児とのコミュニケーションに対するマニュアルは存在しないので、臨機応変にかつ適切な関わりが求められる。また現代ではさまざまな子育てに関する悩みを抱えた保護者も増え、保育士の役割として保護者に対する支援も求められる。つまり保育士とは、さまざまな知識と技術が求められる乳幼児のプロフェッショナルなのであるがゆえに、乳幼児だけではなく、乳幼児を取り巻く保護者や関係機関との連携を図るためにも保育士自身にもコミュニケーション能力は強く求められるのである。

そのような中、多くの保育士が毎年保育士養成校から巣立っているが、学生時代には単に保育の学習をするだけではなく、実習先でさまざまな乳幼児とふれあい、現場の保育士から様々なことを学び、保育技術に対する自己研鑽しているとともに、乳幼児と関わる仕事に就くという意識を高めているものと思われる。

保育士養成校では資格取得を目指すうえで多岐にわたる科目を履修し、その中の「乳児保育」という科目も必修科目となっている。「乳児保育」では乳児に対する専門的な学習を行うとともに、実践に即した内容での授業が展開されることもある。また他の専門科目でも同様に、保育の原理や、乳幼児の発達段階に応じた思考パターンなど、多角的に乳幼児の特性などを専門的な視点に立って学ぶのである。

しかし実習先で乳幼児を目の前にしたときに、養成校での学習を習得しているにもかかわらず、どのような言葉がけをすればよいのかわからず、担当保育士に「もう少し言葉をかけてあげてほしい」との助言をいただいたり、実習終了後「言葉がけをしようと思ってもできていなかった」「言葉がけの大切さがわかりました」と振り返る学生が多く見られる。では、保育士養成校で各授業担当者から言葉がけの仕方を教授されずに学生が実習に行っているのかという疑問が起こってくるが、あらゆる専門科目の中で各担当が言葉がけの重要性については教授しているのではないだろうか。

実習開始前は、各保育士養成校で「乳児保育」等の科目を履修済みかあるいは履修中であると思われる。したがって学生の知識としては、低年齢児の発達段階は押さえられていると理解してもよいのではないだろうか。乳幼児の発達段階を理解することはできていても、実際乳幼児を目の前にしたときになぜ言葉がけがうまくできないのか、ということを考えたとき、現代では少子化により乳幼児と触れ合う機会の減少により、養成校に入学してくるまでに乳幼児とのふれあいをあまり持たない場合が多くなってきたということが原因の一つとしてあげられると思う。どのようにして関わればよいのか、どのように声をかければよいのかは、机上で学ぶだけではなく、実際乳幼児とふれあってはじめて実感できるところがある。

## 7. おわりに

乳幼児期は人間形成の基礎となる重要な時期である。その時期の乳幼児に関わる大人は乳幼児の特性をしっかりと把握した上で関わらなければならない。今日の様々に変わる社会情勢の中、多様な変化に

関係なく、子育てを行わなければならない現代の親は、子育てに関して困難を極めていると言っても過言ではない。昔はきょうだい数も多く、幼い頃より乳幼児と触れ合う機会が多くあったが、現代の乳幼児を育てる親自身もきょうだい数が少なく、また地域コミュニティも希薄で、近所付き合いも極端に減った中で育ち、乳幼児と関わる機会を多くもたずして親になる場合が多い。

力を注いでもすぐには効果が現われず、それに見合う報酬も得られない子育てに関して、親が子育てに関してどのように受け止めているのかを知ること、保育士の今後の研究課題でもあると考える。乳幼児を育てるということは乳幼児の特性を理解する必要がある。つまり乳幼児は泣いたり、大人の思い通りにはいかないということを知っていなければ、児童虐待へと発展していく可能性もあるのではないだろうか。

このように変わりゆく社会情勢を押さえた上で、現代の子育てに何が必要なのか、何が課題なのかをふまえないといけない。一方、保育士は乳幼児に関する専門的な学習や実習を行い、保育に携わっているため、乳幼児への関わり方はもちろんのこと、乳幼児の発達についての基礎知識は得ているものとみなされる。さらに現代の保育士は、子育ての悩みを抱える親に対する相談を受けたり、具体的な援助方法を親に伝えていくことも求められているのである。つまり、乳幼児を保育するだけが保育士の役割ではなくなっているのである。しかし、あくまでも保育士は乳幼児の保育をすることには変わりはない。筆者は演習「乳児保育」の中で、Kの事例を用い、Kが0歳児・1歳児期の言葉の発達について、具体的な事例を挙げ、授業展開した。毎回授業後に学生に書かせているメモの中には、Kの事例に興味を持っているということが記入されていたり、学生自身の体験と筆者が話すKの事例を重ね合わせて考察している学生もいた。学生にとって保育実習で関わる乳幼児から知る発達のプロセスは、何物にもかえがたいが、実習前学習の段階で乳幼児の発達をよりイメージし易いのは、具体例を挙げることだということも感じ取れている。したがって実習前教育のあり方として、より学生に乳幼児理解を深めてもらえるよう、さらなる事例検討が必要ではないかと考える。今後の課題として、乳児保育修得者が、乳幼児の言葉や心身の発達について、事例を挙げた授業を展開することによりどの程度正しく理解できているのかを探る必要があるのではないかと考える。

## 引用文献

- 1 三好行雄「乳幼児言語研究 -1～2歳児における発声語の文法的特質(2)-」武蔵野短期大学紀要 第16輯 2002 30頁
- 2 三好行雄「乳幼児言語研究 -1～2歳児における発声語の文法的特質(2)-」武蔵野短期大学紀要 第16輯 2002 33頁
- 3 中島寿子「子どもの提示的呼びかけについての一考察 -保育所1・2歳児クラスにおける参加観察から-」西南女学院短期大学研究紀要 第50号 2004 40頁
- 4 長谷部和子「言葉の発達をうながす乳幼児期の環境 -1歳～3歳までの家庭環境に関する考察-」東海女子短期大学紀要 第28号 2002 152頁
- 5 三好行雄「乳幼児言語研究-1～2歳児における発声語の文法的な特徴(2)-」武蔵野短期大学紀要 第16輯 2002 25頁
- 6 三好行雄「乳幼児言語研究 -1～2歳児における発声語の文法的特質(2)-」武蔵野短期大学紀要 第16輯 2002 26頁

## 参考文献

- ・金丸智美, 無藤隆「情動調整プロセスの個人差に関する2歳から3歳への発達的变化」  
発達心理学研究 第17巻 第3号 2006
- ・三好行雄「乳幼児言語研究 -1～2歳児における発声語の文法的特質(2)-」武蔵野短期大学紀要 第16輯 2002
- ・中島寿子「子どもの提示的呼びかけについての一考察 -保育所1・2歳児クラスにおける参加観察から-」西南女学院短期大学研究紀要 第50号 2004
- ・長谷部和子「言葉の発達をうながす乳幼児期の環境 -1歳～3歳までの家庭環境に関する考察-」東海女子短期大学紀要 第28号 2002

Abstract

Development of mind and body is active in infants. The childcare person has to understand a developmental stage. This paper considers development of the language about infants from the example of a 2 years-old child. Moreover, the student who aim at the teacher of a nursery school investigated what kind of child image it would have. I want to consider the lesson design of future 'Child Care Education' from these two examples.